これまで、人権尊重の意識づくりのために実施してきた「ハートフルフェスタ」と、男女共同参画社会の実現を目指して実施してきた「女(ひと)と男(ひと)のフォーラム」が一つになり、「ひと to ひとのフォーラム足利」として、昨年12月10日㈯に、市民プラザで開催されました。

午前中は、夏休みに募集した人権に関するポスター、書道、作文の表彰式が行われ、総勢64名の小中高校生が表彰されました。また、作文の最優秀賞作品の朗読も行われました。午後は、「絆から希望を」をテーマに、講演会と四つの分科会が行われました。

講演会

絆から希望を。

講師　玄田 有史さん

平成23年3月11日の東日本大震災は、私達に、想像を越える現実を残していきました。

この状況から、未来へ向かって立ちあがろうとしている人々の中にみえたもの、それは絆と希望であり、それは日本の社会全体が、すでに失いつつあるものであったように思われます。

今回のフォーラムは「絆から希望を」とテーマを掲げ、希望学の提唱者である玄田有史さんに、お話をして頂きました。

玄田さんは、初めに、ご自身が大好きというエピソードの一つを話してくださいました。

ある有名な女性歌手（壮絶な人生を歩んで来たらしい）が、レコード会社の担当者に、ふと訊ねたそうです。

「ねぇ、絶望の反対って何だと思う?」

「それは、希望では…。」

と言う彼の答えに、彼女は納得のいかない表情を浮かべ

「私は、絶望の反対は…、ユーモアだと思う。」

と、言ったそうです。

この話を聞いて、玄田さんは「ユーモア」という言葉を辞書で調べたところ、「社会生活における不要な緊迫を和らげるのに役立つ、婉曲表現によるおかしみ」と書かれていたそうです。

玄田先生は、「希望」についてこう語ります。

現在は格差社会と言われていますが、希望を持てる人、持てない人の格差もあると考えられる。

そして、お金や健康に恵まれないからと言って、必ずしも希望が持てないとは限らない。

今の社会生活には、不要な緊迫を高める要素が多く、婉曲とは反対に、黒か白かという考えの上に生活を強いられ、痛みや悲しみの裏側にあったおかしみが失われてしまったように思える。それから、希望が持ちにくい人の特徴に、さびしさがある。

「無縁社会と言われる中で、ウィーク・タイズ（緩やかなつながり・絆）を大切にして、少しでも希望を持てるようになればと思う」という言葉で、ユーモアにあふれるお話がまとめられました。

（Ma・O）

第1分科会

地域力は市民力

実行委員の木村克子さんから、「東日本大震災の話で人と人の繋がりが大切と思った。皆さんと一緒に考えて行きたい」と挨拶があり、次にパネリストの紹介に入りました。

あしかがさぽーと会代表の益本仁さんは、「足利市の町おこしのためガイドサポート（ガイドブックを見ながら町歩きができるように）を作成中です。自分の町を私自身知らなかった。作成中の地図を見ながら歩いてみて、気づきがたくさんありましたね」と話されました。

（左から）益本さん、柳田さん

佐藤さん

次に、立川市の大山自治会長になり13年目という佐藤良子さんからお話がありました。「女性の会長は少ないため興味を持たれています。立川市内に勤め、都営住宅に入居、子ども3人を育てました。近所の人たち（おばあちゃん）が暖かく迎えてくれ、よく手伝ってくれました。風邪をひいてお粥が届いた事もあります。高齢者・若年層・子どもと平均がとれている町でした。その後、時代と共に家が新築され高層化、マンション化してきました。あの頃の町に…との思いで、平成11年から会長となりました。このときは投票で決められました。女だてらにと、いじめ、いやがらせに遭いましたが、40～50歳代の人たちがサポートをしてくれました」。

足利青年会議所副理事長の柳田憲英さんは、「青年会議所が中心となり『足利尊氏公マラソン大会』を11月に開催しています。また、東日本大震災をふりかえり、地域での絆が重要であると感じ、旧西小学校でコミュニティフェスタを実施しました。その他、自主活動を続けて行きたいと思っています」と話されました。

これを受け、益本さんは「地域コミュニティは自治会だと考えています。現在は核家族化しているが『向こう三軒』という地域にならないかと思う」と話されました。

また、「住民主体の自治会・能力・工夫・コミュニティビジネス」を基盤にしているという佐藤さんは、「近くにあってお金になるものは何でもやります。公園の掃除管理、駐車場管理、水道、電気の検針（高齢者の安否確認）など、企業を活用して孤独死ゼロを目指しています。元気で使命感に燃えるのには、『知恵・高齢者を敬う心・人を作る、気が付いた時にすぐ行動に移す』など人間のノウハウが必要です。五気…元気、陽気、根気、強気、やる気が大事」と話されました。（Mi・K）

第2分科会

地域から始める輪と和

住んでいる足利を見つめて「絆を強くし活気のある街にするにはどうするのか!」を考えたいと、実行委員の大島裕子さんから挨拶があり、地域包括ケアを中心に分科会は進みました。

（左から）加藤さん、秋野さん

初めに、講師でさわやか福祉財団の加藤昌之さんから「介護保険制度」について基本的な説明がありました。

「地域包括ケア」といって、日常生活圏域（30分で対応出来る）内で、医療・介護・予防・生活支援・住まいの整備などが提供される、高齢者のふれあい社会を作ろうというものです。そして、相互信頼や人との自然な支え合い、高齢者や子どもとの交流などを通して、人づくりが地域を活性化するみなもとになるのです。

また、東日本大震災復興の話や被災者のサポート対応、そして「地域包括ケア」のイメージなど、介護の予防や地域の支え合いの仕組みなど、実例を多数あげた説明がありました。

次に、市役所いきいき長寿課長の秋野順子さんから、「足利市地域包括支援センター」が平成23年10月から少し増え6か所になったことと、業務内容の説明がありました。

質問の時間では、法改正直後で不安な点が指摘されましたが、市の方では「今後中身の充実に力を入れていきます」とのことでした。

参加した方に感想を聞いたところ、「不明な点があったのですが、玄田有史さんの講演と分科会での話を合わせると理解が深まりました」と話してくれました。

（問合せ…いきいき長寿課・電話㉑2246）

（Ma・K）